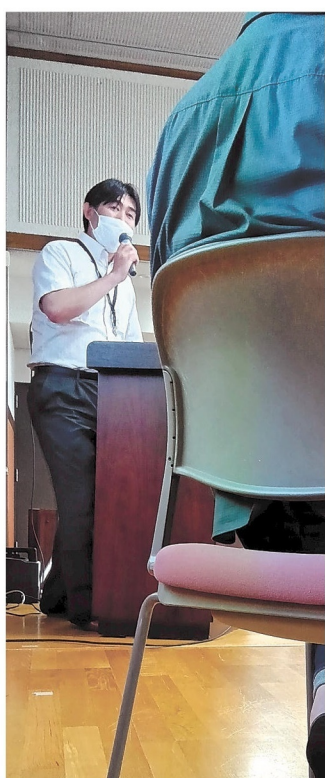


ハンセン病問題 教師も学ぶ



差別被害の経験と教師への期待を語った男性(右)と関口さん

ハンセン病問題をテーマにした仙台市教委の教員研修が12日、宮城野区の市教育センターであった。3年目研修の一環で、小中学校と特別支援学校の約180人が参加した。

同市の市民団体「ハンセン病問題を考える市民のつどい・みやぎ」共同代表の関口真爾さん(52)と、ハンセン病から回復した父親(故人)を持つ県内の60代男性が講師を務めた。

関口さんは、1996年のらい予防法廃止まで、約90年続いた国の強制隔離政策について説明。「感染力は極めて弱く、遺伝もしない

仙台で研修 家族が講話

のに本人や家族は偏見に苦しんだ。今もなお、差別を恐れて暮らす人がたくさんいる」と指摘した。

男性は関口さんの質問を受けながら、自身の経験を語った。「小中学校で孤立したが、中学3年の時の担任がいじめを止めてくれた」と振り返り、「先生の力は大きい。子どものサインを見逃さず、教え子を守る盾になってほしい」と参加者に呼びかけた。

人権教育への理解を深めようと、市教委は2018年度に教員研修にハンセン病問題の学習を取り入れた。